

タイトル	会話における「認識性」を巡る中国語の事例分析
著者名(所属)	遠藤智子(東京大学総合文化研究科)
連絡先Eメール	endotomoko@g.ecc.u-tokyo.ac.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>中国語の会話について日本語で論じる際、しばしば会話の日本語訳に違和感を覚えることがある。中国語にも語気助詞と呼ばれる文法的要素が存在し、発話末にも用いられるが、使用頻度が日本語の発話末要素より低いのか、発話末に何も付加的な要素がないことが多い。一方、同様の状況での発話を日本語するのであれば何らかの発話末要素がないと落ち着かないため、日本語訳としての自然さを優先した訳をすると、中国語の発話には現れていない要素を付与してしまうことになるのである。発話末は会話相手への働きかけが現れやすい位置であり、その位置における文法的要素の使用状況は、認識性への配慮の表明や行為の構築にとって重要な示唆をもつ。</p> <p>近年の日中対照研究においては、文法的要素の表す意味上の差異のレベルを超え、コミュニケーション行動における原理の違いについて考察をする研究が増えている。その議論の中では、発話内容の出来事が「話し手の認識」に属するか否かが説明要因として用いられることも多い(井上 2018 等)が、データの性質や分析手法の違いを考えると、会話分析における認識性の議論とは同一視できない。</p> <p>中国語に関する会話分析はその初期には英語圏で発展し、近年はマルチモーダル分析や様々な制度的場面の分析も進んでいる(Luke 2019)。また、特に 2010 年代後半以降は中国大陸でも会話分析への関心が高まっている(方・李 2020 等)。日本国内でも中国語の会話分析を行う者は増えている。認識性についての議論も見られるが、日本語会話の研究に比べるとまだ発展の余地が大きく残されているようである。</p> <p>本発表では、中国語の会話のやりとりを日本語に訳す際に生じる齟齬を契機として、中国語会話における認識性に対する配慮の現れ方を考察する。特に、発話末の語気助詞の使用と不使用に注目する。状況を統一したうえで比較をすることの必要性を指摘し、語気助詞の使用・不使用と付随効果としての認識性標識を考える(Cf. 林 2018)。また、今後の研究の方向性として、量的な根拠を出す意義についても議論する(Cf. Wang 2021)。</p> <p><b>参考文献</b></p> <p>方梅・李先銀(主編) 2020. 《互动语言学与汉语研究》第三辑. 北京: 北京语言大学出版社.</p> <p>林誠. 2018a. 「会話分析と他言語比較」平本毅ほか編『会話分析の広がり』ひつじ書房. pp.226-252.</p> <p>井上優. 2018. 疑問発話における前提のあり方—日本語と中国語の対照—『社会言語科学』第 21 巻第 1 号 pp.146-159.</p> <p>Luke, Kang-Kwong. 2019. Chinese conversation analysis: New method, new data, new insights. In Chris Shei (ed.), <i>The Routledge Handbook of Chinese Discourse Analysis</i>, Routledge. 21-35.</p> <p>Wang, Wei. 2021. The question-response system in Mandarin conversation. <i>Pragmatics</i>.</p>	